

Creative

International Magazine 号外

Futsal 全国大会で寒川高校はベスト4入りを果たしました。その軌跡を SAL の記事とともに振り返ります。

第9回全日本U-18フットサル選手権大会・準決勝の藤井学園寒川高校(四国代表地域)と名古屋U-18の試合は、「サッカーチーム vs フットサルチーム」という、歴代大会でも見どころとされてきた構図の対戦だった。1次ラウンドの成績を見ると、寒川は3試合を3連勝し、29得点・9失点と今大会随一の圧倒的な攻撃力を示していた。

周到だった“サッカーチーム”藤井学園寒川高校

30分までこの試合を見ていた人たちは、名古屋U-18の勝利を確信していただろう。

今大会の1次ラウンドは15分ハーフで行われたが、決勝ラウンドからは20分ハーフで行われた。本来ならば、日常的に20分プレーイングタイムで練習試合などを行っているフットサルチームが優位になるはずだ。だが、この試合はそうならなかった。

物部(名古屋GK)が「1次ラウンドだったら、もう2-0のまま試合が終わっていました。その感覚のズレがあった」と振り返った一方で、プレーイングタイムの20分ハーフを経験したことがなかった寒川は、最初からこのラスト10分間にすべてを賭ける腹づもりだったという。寒川がスイッチを入れたのは、32分にとったタイムアウトの時だった。

寒川の岡田勝監督は試合後、このように振り返った。「準々決勝を前に『絶対に失点するだろう』と話していました。また『相手は失点ゼロで勝ち上がってきたチームだから、我慢比べのゲームになるぞ』と確認していたんです。戦略としては『残り10分から勝負しよう』と。そこまでは、我慢比べでしたね」

寒川で、実際に細かく指示を出していたのは、ベンチの永田凱聖だった。本来は中心選手の一人だが、大会直前にヒザの靭帯を負傷。ベンチ入りしたもののプレーはせずに、戦況を見て、チームメイトに指示を送っていた。寒川の強みは、なんといっても1次ラウンドの3試合で10得点を挙げた10番・三宅悠斗と、9得点を挙げた11番・牧敬斗のコンビである。永田は、前後半のタイムアウトで伝えた指示について、こう明かした。

「うちのピヴォ(三宅)が厳しくマークされていたのは、前半に入っただけで分かりました。そのピヴォをサイドに開かせることで、中央のスペースが空きます。そこに11番がカットインしてこうという話をしたのが、前半のタイムアウトでした。後半の時は、サイドに開く10番の動きに相手がついてこなくなり、11番のところまでつづいで、取り切る形になってきていました。そこで相手のフィクソがボールを奪いに行ったら、10番が寄ったフィクソの背中を回って、もう1回ゴール前に顔を出して、ピヴォ当てを受けられるようにしようと、指示を出していました」

第2ピリオドでタイムアウトを取った寒川は、共通の狙いを持って名古屋のゴールを目指すことができていた。36分、高い位置でボールを奪った牧が仕掛け、中に入れたボールをピヴォの三宅が決めて1点を返す。そして、試合終了間際、残り56秒には、まさに永田の指示通りの動きから、ゴール正面に入った三宅が同点ゴールを決めた。永田は、「高校サッカーをしているから、タフな選手が多い。そこは自信がありました。県大会からも、こういう展開の試合が多かったので、変な自信がありました」と、最後の10分間に爆発できる余力があると信じていたと言う。

また、三宅は1点目を挙げた後、38分に名古屋U-18が取ったタイムアウトの影響に触れた。「あれがいいタイミングで、ありがたかったです。ピヴォなので、前から追いかけていて、しんどい時間帯でした。あそこで休めたのは大きかったです」と、FPをわずか5人で回していたチームの疲労軽減につながったと明かした。



語り継ぎたくなる高校年代のフットサル名勝負

残り4秒、味方からのバックパスがズレて、物部に入る。ボールをコントロールして、大きく蹴ろうとした物部だったが、これを狙っている男がいた。ここまで2ゴールを挙げた、三宅だ。

「映像を分析した時に、名古屋はGKがボールを持つことが多かったのですが、ちょっともたつく印象を受けました。すごく実力のある選手ですが、スツといけば、追いつくかなと。自分は、瞬発力に特徴があるので狙っていました」物部が持ち直したボールを奪った三宅は、そのまま無人のゴールに決勝点となるシュートを流し込み、40分で決着をつけた。

様々な要素が複雑に絡み合って決した勝敗には、様々な解釈がなされるだろう。まだ10年にも満たない歴史の浅い大会に、また一つ語り継ぎたくなるような名勝負が刻まれた。

文・写真=河合拓

得点王！代表監督熱視線！ 大会 No.1 プレーヤー【藤井学園寒川#10 三宅悠斗 | Fに推したい高校生】



まずは大会終了直後、フットサル日本代表と U-20 フットサル日本代表の監督を兼任している木暮賢一郎氏が直々に「今大会ナンバーワン選手」として、将来的にフットサル代表活動に参加する可能性を訪ねていた藤井学園寒川高校の三宅悠斗だ。

普段、サッカーをしている選手が、この大会に向けて初めてフットサルシューズを買ってプレーする例は少なくない。

だが、この U-18 フットサル選手権大会で、初めてフットサルをプレーしたレフティは、「めっちゃめっちゃ恥ずかしいのですが、予選から友達に借りているんです。まさか全国大会まで行くと思っていないと……」と、県予選から全国大会の 3 位決定戦まで、友人に借りたというフットサルシューズでプレーし続けた。そのプレーぶりは、まさに弘法筆を選ばず。全国大会では、初戦の高川学園高戦(15-1)で、いきなり 4 ゴールを叩き出すと、その後も飯塚高戦(7-3)で 4 得点、近江高校ビーパイレーツ戦(7-5)で 2 得点と、1 次ラウンドで計 10 得点を挙げる。さらに決勝ラウンドでも、準々決勝の名古屋 U-18 戦(3-2)ではチームの全得点を一人で挙げ、第 1 回大会以来の決勝進出を目指す相手を打ち破った。藤井学園寒川高は、ほとんど選手交代を行わずにフィールドプレーヤーは 5、6 人で戦っていたため、準決勝以降は三宅も疲労の色が濃く出ていた。それでも、準決勝の遊学館高校戦(3-5)でも 1 得点、3 位決定戦の聖和学園高校フットサル部戦(3-4)でも 1 得点と、出場した全 6 試合で得点を挙げ、今大会最多となる 15 得点を叩き出している。

最大の魅力は、この得点能力。ゴール前でボールを受けると、確実にゴールマウスにボールを飛ばす。ボールを受けてからの反転のスピードも驚異的であり、さらに GK のタイミングを外す独特の間合いとリズムでシュートを放つため、ゴール前に GK がいても関係なくボールがネットを揺らすのだ。また、一瞬の爆発的な瞬発力は、最前線での守備でも生かされた。名古屋 U-18 との試合で挙げた決勝ゴールは、その賜物だ。少ない人数で戦った藤井学園寒川高のなかで、短時間ではあったがフィクソに入る時間帯があったことも付け加えておく。

近年では珍しく、大会前に進路としてフットサル選手になることを、まったく考えていなかった三宅だが、「高校サッカー選手権に一度、スイッチを切り替えますが、将来のことはしっかり考えたい」と、フットサルを続けることも視野に入れ始めていた。

ピヴォーアラのコンビでほしい硬軟自在ドリブラー【藤井学園寒川 #11 牧敬斗 | Fに推したい高校生】



三宅との関係はFリーグでも通用する！

借りたシューズで得点王に輝いた三宅悠斗とともに藤井学園寒川高で脅威となっていたのが、今大会通算 10 得点を挙げた牧敬斗だ。三宅とは小学生時代から、同じチームでプレーしており抜群のコンビネーションを発揮。ピッチ中央で存在感を示した三宅に対し、牧は左サイドから積極的にドリブルで仕掛け、得意とするカットインからゴールを量産した。縦に仕掛けて深い位置までボールを運んでからは、三宅にボールを届けており、2 人の関係は Fリーグでも、ユニットとして十分に機能しそうだ。体格的には小柄だが、フィジカルは強く、当たり負けもしない。本人は守備について「苦手」というが、小柄であることを生かして相手の懐に入り込み、力強くボールを奪うことができ、精神的にプレッシングをこなしてハードワークもいとわない。ボールを奪ってから、まずは仕掛けることを意識し、ショートカウンターから単独でシュートまで持ち込む場面も見られた。名古屋 U-18、町田 U-18 に対しては、ボールを失うことは少なかったが、ドリブルでチャンスを作るところまではいかなかった。それでも、「フットサルならではの守備の仕方に上回られていたと思う。1 対 1 の個に関しては、負ける要素はなかった」と、個の力が全国の舞台で通用したことに自信を深めていた。将来的な Fリーグ挑戦についても「興味はあります。高校サッカーを終えてから考えたい」と、三宅同様に今大会を経て、新たな選択肢が増えたようだ。 文・写真=河合拓

